資料２

欠席委員の意見

委員	意見
委員Ａ	・コロナ禍により航空業界は他の輸送業界にも増して大きな打撃を被ったが、今回ご呈示のあった資料にもあるとおり、今後航空需要は全体としては急速に回復していくものと考えられる。しかしながら、需要の回復過程で全ての航空路線が均一に回復基調をたどるとは限らず、回復に偏りが生じる可能性もある。 ・但馬空港においては、需要回復の動きに取り残されることがないよう、地域主導による積極的な需要拡大策を講じていくことを期待している。 ・他方、空港ハード面では、当面、安全性や信頼性の向上策を優先的に講じていく必要があると考える。まずは国内法に規定される滑走路端安全区域（RESA）の整備を実施するとともに、最新の航空保安システムを活用した就航率の改善策についても、投資効果を見極めたうえで、積極的に講じることが望まれる。安全性及び信頼性の確保・向上は、航空需要増を図っていく上で、欠くことの出来ない基本要件となっているためである。 ・今回所用により懇話会に参加出来ないが、ポストコロナの時代に但馬空港の航空需要が着実に拡大し、地域にとって欠かせないインフラとして存在感を増していくことを期待している。
委員Ｂ	・利用促進のために運賃補助する取組みには限界がある。キャンペーンが終われば乗らなくなる。運賃補助のような経済的な便益だけでなく、行ってみたくなるような情緒的な便益を同時に仕掛ける必要がある。 ・ビジネスと観光では、アクセスに求めるものが違う。ビジネスは速達性を求める。観光客は飛行機で但馬空港に降り立った後、必ずしも便利な移動を望んでいるわけではない。ビジネスの観点とは異なる特殊性もある。道中に見られる景色、意外な発見、出会いを楽しみ、ワクワクやドキドキを連続させながら、ジオパークや城崎温泉に到着することを望んでいる。 ・芸術性の高い街の空気をゆっくり楽しみながら、環境に優しい交通手段で移動するスローツーリズムは大きな魅力である。目的地に着くまでいかに観光客に夢を見せ続けることができるかが大切。 ・飛行機に乗ることを目的化するなら観光列車のような「観光飛行機」を運航するのも面白い取組み。飛行機に乗らなければ体験できない内容であれば、ハイプライスであっても利用が見込める。

資料２

	・豊岡市は、国際認証団体より「世界の持続可能な観光地トップ 100」に認定された世界を代表する１都市である。今後は、自然との共生都市を旅行目的地とするアクセスにおいて、カーボンオフセットの仕組みを取り入れた航空機利用を検討することが望まれる。
委員Ｃ	・私が学長をしている芸術文化観光専門職大学の学年定員は８０名。４年後には３２０名となり、教員職員も８０名程いる。彼らの８割以上は県外の出身者である。航空機の利用に抵抗のない若い世代が市内に住むことになるので、彼らの地元との往来はもとより、ご家族の訪問時にも航空機の利用が中心となる。このことはこれまでの但馬地域には無かった大きな環境変化であり、活発な利用につなげたい。 ・今後、豊岡演劇祭が本格展開できれば、全国から但馬地域に観客が集うことになる。昨年度は５千人の観客が訪れ、今年はコロナ禍で中止されたが１万人を見込んでいた。当面は伊丹経由での往来となるが、航空機利用は時間距離が縮まり、演劇祭の活性化につながる。 ・時間距離が縮まることで体の負担軽減にも繋がるので、約 200 人の劇団員には東京・但馬間の移動に航空機利用を義務づけており、月 40～50 人が利用している。航空路線があればその速達性から、拠点と活動の場を一緒にする必要がない。 ・将来的には世界中からアーティスト、観客を呼び込む。但馬空港を利用した移動利便性の一層の向上に期待している。